

ベースボールにみるグローバル化 (2) — メキシコ野球にみるローカリティ —

石 原 豊 一

はじめに

1：メキシコへのスポーツ，野球の普及

1-1 メキシコへのスポーツ流入

1-2 メキシコへの野球伝来

1-3 プロ野球の創設と発展，そしてMLBによる包摂

1-4 メキシコプロ野球の現状

2：ローカリティを刺激する場としての野球

2-1 スポーツ受容によって刺激されるローカリティ

2-2 アイデンティティ形成の場としての野球

3：メキシコ野球にみられるローカリティ

3-1 メキシコ性構築の場としての野球

3-2 「ノロエステ」～拡大するプロ野球の周縁におけるローカリティ

3-3 遠隔地において保存されるアイデンティティ～新たなローカリティの形

おわりに

はじめに

筆者は先に、近年のスポーツのグローバル化の特徴を、欧米発の「中核」の文化事象が、資本と結びついたプロ興行という形で「周辺」を包摂してゆくシステムの拡大であるとする視点から、米国生まれのスポーツである野球のドミニカ共和国（以下ドミニカ）への浸透を分析した（石原：2008）。

産業化の所産とも言えるスポーツという文化事象は、欧米発の近代化の波に乗って世界中に広がった（グットマン：1997）。ゲルバーは、米国に生まれた野球に、産業化時代の労働の質

的变化の反映を見、このことを米国の近代化とその国民的娯楽とも称される野球との密接な関係と関連付けた (Gelber : 1983)。この文脈においては、19 世紀末以降の中南米・カリブ海地域の近代化は、米国の政治的、経済的影響力の増大と平行した形で進み、野球の普及はその表象であると解釈できる¹⁾。同様に、カリブ海地域へのバスケットボールの浸透 (Mandle & Mandle : 1994) なども米国文化によるラテンアメリカ・カリブ地域のヘゲモニー的包摂の例と言える。

しかし、グローバリゼーション研究は「中核」から「周辺」への経済的・文化的影響力の包摂・浸透というモデル (ウォーラステイン : 1993, トムリンソン : 1997 など) から、「中核」からの刺激による「周辺」のローカリティの再活性化や「中核」と「周辺」の雑種の融合というモデル (ロバートソン : 1997, フリードマン : 2000 など) へと移り変わりを見せている。「中核」からの流れに反するローカルな圧力による多様化の促進という文脈から見えるのは、「中核」による一方的な制度・経済・文化的包摂という視点だけでは回収できないグローバル化という現象である。グローバル化とは様々なプロセスが重なり合った複合的現象であり、その中では上方統合の力と下方拡散の力の均衡が働いている (ギデンズ : 2001, 32-33)。

リッター (2005) はグローバル化のもつ均質性と多様性を整理し、「中核」からの資本の浸透による均質化である「グロースバル化 (globalization)」とローカルなものと「中核」の融合であるグローカル化の同時進行にその本質をみた。

スポーツに目を移せば、ドミニカへの北米プロ野球・MLB の影響力の増大を文化帝国主義的観点でとらえたクライン自身も、一方では、弱国のチームが強国のチームを倒したり、大リーグのマーチャンダイズの拡大に対してファンが地元チームの野球帽を選ぶことによって米国資本に対する不同意を示すように、「中核」である米国に対する憤慨や対抗心を表明する「抗争の場」を野球というスポーツが、「周辺」たるドミニカのひとびとに提供していることを述べている (Klein : 1991, 111, 116-120)。又、「中核」による「周辺」の包摂過程におけるアスリートの移動に伴うヘゲモニー的構図の出現 (Spracklen : 2008) の一方で起こる野球受容に伴うメキシコ人の米国への対抗意識の増大のような、スポーツ普及によるローカリティの創造も観察されている (Arbena et al. : 1991)。ここでは野球という米国発のグローバル文化が、中南米への普及の過程で現地の様々な要素を取り込み、独自の「ローカライズド」²⁾ (遠藤 : 2007) された野球に再解釈され、グローバル化した世界での新たな自己確認の場として機能している。

本稿では、ドミニカ野球に見た「グロースバル化」を補完する意味でグローカル化したスポーツの例としてメキシコ野球を取り上げる。冬季リーグ化したドミニカ野球とは異なり、MLB を核とする「オーガナイズド・ベースボール」³⁾ に包摂されながらも、北米野球とシーズンを同じくしたメキシカンリーグ (Liga Mexicana de Beisbol, 以下 LMB) を頂点とするピラミッド型の組織を構築しているメキシコのプロ野球からは、一見「中核」に取り込まれる「周辺」

がかえってローカリティを再活性化させてゆくというスポーツのグローバル化が見せる一側面が観察できる。このローカリティはローカルなコミュニティや国家から人々を引き離しグローバルな領域に放り出すグローバル化の力学（ギデンズ：2001,32-33）の中、「脱領土化」⁴⁾（アパデュライ：2004）し、それ自身が空間を越えて存在するようになる。このローカリティの事例を世界規模のプロ野球の連関関係の周縁ともいえるメキシコのマイナーリーグの選手や野球の技能を携えて世界中を渡り歩くメキシコ人元大リーガーへのインタビューから提示し、「周辺」からの刺激を受けつつも拡大する野球のグローバル化の本質を以下において明らかにしてゆく。

1：メキシコへのスポーツ，野球の普及

1-1：メキシコへのスポーツ流入

現在メキシコに残るメソアメリカの遺跡にある球技場の跡は、前近代におけるこの地の身体運動文化の存在を窺わせる。独立前既に、都市のエリート層を中心にサッカー、クリケット、自転車競技などが愛好されるなど（Beezley：1988）、19世紀にスペインから独立したこの国の近代化は、欧州や先に独立を果たした隣国アメリカ合衆国（以下米国）からの制度、文化の摂取であり、スポーツの流入はそれと平行したものだ。

米国を中心とする外資の導入による近代化を推進したディアス政権（1876-1911）下では、米国発祥のスポーツが普及し、同時にスポーツ興行が出現した（Beezley：1985）。米国からの鉄道関係の労働者によってもたらされた野球は、路線の拡張とともに広がり、そこに米国のシンボルをみたメキシコ人に受け入れられ、普及していった。（McGehee：1994）。これらメキシコの伝統ゲームにとってかわったスポーツは米国ヘゲモニーの象徴としての性格を帯びていた（Sckell et al：1993）。

1-2：メキシコへの野球伝来

野球のメキシコへの伝来は19世紀末とされるが、そのルートについては、北部国境あるいは太平洋沿岸経由の米国からと、南部ユカタン半島経由のキューバからの2つが考えられる（Joseph：1988, Virtue：2008,23-25）。このスポーツの普及はメキシコのアメリカ化ととらえることもできるが、実際はその初期においてはプレーしていたのは米国人が中心であり、現地人の間にこのスポーツが浸透したとは言いがたい状況であった（グットマン：1997,101）。

それでも1884年には首都メキシコシティで最初の試合が行われ、大西洋岸の港町ベラクルスでもクラブチームが結成された。20世紀を迎える頃には地元民に米国人のプロ選手を加えたリーグ戦や、米国やキューバからのプロチームの来訪など興行化が試みられたが、成功を収め

ることができず、さまざまなリーグが興亡を繰り返した (Beezley : 1985)。

1-3 : プロ野球の創設と発展, そして MLB による包摂

1925 年, 米国で活動していたスポーツ記者レイエス (Alejandoro Aguilar Reyes) らによって, 現在まで続く LMB が組織されたのがメキシコのプロ野球の始まりである (Virtue : 2008,28)。

5 球団で始まった LMB は当初, メキシコ中部に展開される地方リーグの域を出るものではなかったが (Klein : 1997,47-50) ⁵⁾, 1940 年代になると発展を遂げ, MLB に対抗する勢力に成長する。この立役者が 1930 年代に急速にその事業を拡大した財閥の総帥であるパスケル (Jorge Pasquel) である。

彼が 1940 年, 首都メキシコシティに故郷の名を冠した「アスルス・デ・ベラクルス (Azuls de Veracruz)」を設立すると ⁶⁾, リーグ全体にも強い影響力を持つようになり, 1946 年にはリーグの会長に就任した。

すでに 1930 年代から「カラーバリア」のため MLB でプレーできなかったニグロリーグのアフリカ系米国人選手が LMB に加入していたが, 40 年代になると, パスケルによりニグロリーグの流入は加速された ⁷⁾。好選手を集めファンの獲得に成功した LMB が, 「オーガナイズド・ベースボール」からも選手を引き抜くようになると, MLB は 1946 年, 「メキシカンナショナルリーグ」の設立をもってこれに対抗するが, これも開幕後時を経ずして解散に追い込まれた (Klein : 1997,77)。

LMB による選手の引き抜きに対して MLB コミッショナー, チャンドラー (Albert Benjamin “Happy” Chandler) は, MLB との契約を破棄してメキシコへ渡った選手に対する 5 年間の「オーガナイズド・ベースボール」での出場停止措置をもって望み, 両者の対立はやがて選手の契約を巡る法廷闘争, 外交問題までに発展した。

結局, この「野球戦争 (Klein : 1994)」は, LMB の「敗戦」という形で終わる。球場などの設備の不備は MLB から移籍した選手の不満を呼び, シーズンの途中で米国へ帰国する選手が続出, 選手を引き抜きのために高騰した選手の報酬は各球団の財政を圧迫した ⁸⁾。又, 十分な収容人数を確保できない球場は, 支出を補う入場料収入を集めることができず, 結局 LMB は米国から引き抜いた選手の多くを維持することはできなかった。

さらに 1948 年, 選手の報酬について, その上限を設けるサラリーキャップ制が導入されると, 金銭的魅力のなくなった LMB への北米からの有力選手の流入はなくなり, 観客も減少した。1946 年から 48 年の間に 36 万 2000 ドルの損失を出した LMB は, 4 球団に縮小, メキシコシティで全ての試合を消化する地方リーグへと転落した。1949 年にリーグ会長の座から降りたパスケルが 1955 年に急死すると, LMB は「オーガナイズド・ベースボール」の中のマイナーリーグ

のひとつとして組み入れられ、MLBに包摂されることとなった (Virtue: 2008, 203)。

パスケルの死後、LMBは財閥の総帥、ペラルタ (Alejo Peralta) により再建された (LaFrance et al.: 1995)。自身が創設した「ティグレス・デ・メヒコ (Tigres de Mexico)」他、計7球団を保有した彼の下、LMBは球団数の拡大を行い⁹⁾、地方に散在していたリーグをファームチームとして組み込むなど国内のプロ野球の組織化を進め、現在に至っている。

1-4: メキシコプロ野球の現状

メキシコプロ野球の現状は以下のとおりである。

MLBの下部組織として3Aクラスに位置づけられたLMBを頂点に、メキシコのプロ野球はピラミッド型の組織を形成している。

LMBが運営する「アカデミー」では、「クラッセA (ClasseA, 以下A級)」と「リガ・アカデミア・ルーキ (Liga Academia Rookie, 以下ルーキー級)」の2つのリーグ戦が実施され、スプリングトレーニング後のA級リーグで選別された選手は、夏季に行われる「北ソノラリーグ (Liga Norte de Sonora)」や「タバスコ州リーグ (Liga Tabasquana)」に送られる。この両リーグは北米のマイナーリーグ同様、独立運営された地方の球団が、LMBの各球団から選手を受け入れて興行を行っている¹⁰⁾。これらのリーグはLMBのファームの役割を果たしており、選手は適宜LMBの親球団のそれと入れ替わる。ルーキー級リーグは新人選手がアカデミーでのトレーニングの後、実践に挑むリーグで、秋から冬にかけて行われる。

メキシコのプロ野球の大きな特徴は、その温暖な気候を利用したプロ興行が一年を通して行われていることにある。上記LMB傘下の各リーグの他、冬季にはLMB所属の若手育成のための「ノロエステリーグ (Liga Noroeste)」と「ベラクルス州リーグ (Liga Veracruzana)」¹¹⁾、それにLMBとは別組織の、「メキシカンパシフィックリーグ (Liga Mexinano de Pasifico, 以下LMP)」が行われる。LMPにはLMB各球団の選手や北米プロ野球チームに所属する選手が参加している。メキシコ全土に展開するLMB以外の各リーグは、夏季(5~9月)、冬季(10月~1月)に野球の盛んな太平洋岸地方(ソノラ州、シアノア州、ナジャリ州)、南部(ベラクルス州、タバスコ州)の地方リーグとして展開される。

2: ローカリティを刺激する場としての野球

前章で述べられたメキシコの野球の姿からは、MLBという多国籍資本による「周辺」の包摂という文脈が浮かぶ。野球というスポーツが文化的に優勢な地域は、歴史的・経済的に米国の影響の強いところである。米国で19世紀末からスペクテイター・スポーツ¹²⁾としての地位を獲得していったこのスポーツは、普及先の多くの国・地域でプロ化してゆくが、地理的に近

接した中南米カリブ地域においては、1950年代以降のMLBの全米への拡張とそれに伴う北米プロ野球の序列化と平行する形で、各地のプロ野球はMLBの事実上のファームと化していった(石原:2008)¹³⁾。

しかし、一方では、野球の普及がメキシコの人々のアイデンティティやローカリティを刺激する様も窺える。「野球戦争」からは、スポーツを通じた大国との競争によって呼び起こされたメキシコ人意識が観察できる。メキシコのプロ野球リーグ、LMBは結果的にMLBによって包摂され、「オーガナイズド・ベースボール」の一部に組み込まれるものの、リーグ及び各球団は独自に運営され、MLB球団直属のファームチームとはなっていない¹⁴⁾。このことも又、メキシコプロ野球を「われわれの野球」に仕立て上げており、このスポーツがローカリティ構築に利用される要因になっている。

2-1: スポーツ受容によって刺激されるローカリティ

かつてスポーツは、宣教師により植民地を「文明化」するツール＝「筋肉の福音」として機能した(石井:1999)。この文化帝国主義的なスポーツの普及観に対して、グットマンは、スポーツの伝播が政治制度や経済システムの伝播とは異なった被支配民族による支配民族の文化の自発的受容という側面をもつことを指摘し、「文化ヘゲモニー」という視角を提示した。その実践の場においては現実世界では達成できない支配民族に対する優越を感じる可能性を見出せる(グットマン:1997,196-215)。この文脈においては、「中核」から「周辺」へのスポーツの普及は、単なる欧米による地球規模の文化の均質化ではなく、欧米文化によるローカル文化への刺激がかえってローカリティを生み出す可能性が読み取れる。フーリアンも、英国支配下の反植民地闘争の中で発達したアイリッシュスポーツや、南アフリカ共和国におけるアフリカーナ・ナショナリズム再活性化へのサッカーやクリケットの利用にグローバルスポーツのローカルな意味を見出し、スポーツのグローバル化を一元的に捉えずこれを文化帝国主義、アメリカ化などの均質化とクレオール化、グローカル化などの融合化、多様化など様々なモデルに分類できるとした(Houlihan:1994)。

アルビーナは、メキシコにおいて、欧米への憧れからエリート層に普及したスポーツが、チームワーク、犠牲、忠誠などのクリスチャン的価値を浸透させながら、その一方で、その欧化された舞台を通じてのメキシコ人意識形成に役割を果たしたことを指摘している。スポーツ受容によって呼び起こされたローカリティは、1920年代以降、メキシコ・スポーツの国際舞台進出によってさらに刺激され、特に第2次大戦後、スポーツの商業化と国際化の進展の帰結としてのプロスポーツが、米国に対抗する手段として両国のひとつと意識されるようになったことを指摘し、その典型をクライン(Klein:1994,1997)などと同じく「野球戦争」に求めている(Arbena:1991)。又、ラフランス(LaFrance:1985)は、1980年代に米国でブームを巻き起

こしたメキシコ人投手フェルナンド・バレンズエラ (Fernando Valenzuela) が両国の「メキシコ人」のトランスナショナルなアイデンティティのシンボルとなったことを指摘している。

単一の資本主義経済による統合のプロセスとある地域のナショナリズムによる解放のプロセスは同時に進行する (アンダーソン: 2005,99) とすれば, プロ野球というシステムによる統合の過程にあっても, 包摂される「周辺」における「中核」文化の受容とグローバル化に伴うローカル意識の勃興は矛盾することなく並存する。その結果, スポーツの拡大に伴ってグローバルな文化は単にそのまま直輸入されるよりは, その伝播先の文化要素をとり込んで, ある程度は現地化されてゆく (西山: 2006,62)。

又, 異国でのプレーにおいて同一の競技の場にながら, 「彼ら」の競技と「われわれの」競技の差を感じるによりアイデンティティを強化する例は, 同じサッカーという競技をしながらも, フランスに移籍したスコットランド人選手が, ゴール時のハグやキスという異国の習慣に驚く様 (Moorhouse: 1994) や, 日本プロ野球における「外国人助っ人」(ホワイティング: 1980,1990, クロマティ & ホワイティング: 1991) や韓国プロ野球に身を投じた在日コリアン選手 (関川: 1984) が体験する異文化体験など, グローバルなスポーツシーンの至るところで見ることができる。

2-2: アイデンティティ形成の場としての野球

野球が米国の国民的娯楽と呼ばれる背景には, このスポーツが米国人意識の核としての側面をもつことが挙げられる (小田切: 1982,74)。全米に普及してゆく過程で, このスポーツは, 国民的娯楽として米国人意識の醸成に寄与する一方, マイノリティグループにとっても, 独自のチーム, リーグの構築を通じて, 米国社会の一員としてのアイデンティティ形成だけではないエスニックなアイデンティティ保存の場としても機能した (Franks: 2001, Nakagawa: 2001)。

メキシコプロ野球の歴史において, 1940年代の「野球戦争」の時代は黄金時代でもあった。地球規模のプロスポーツのシステムが未確立なこの時代, 小国ドミニカのプロ野球もまた, 独裁者トルヒーヨの政治力・財力をもってすれば, 米国からニグロリーグのトップ選手を引き抜くことができたし (Klein: 1991), コロンビアのサッカーリーグも英国プロリーグの選手を引き抜きこれに対抗している (Mason: 1994)。スポーツ興行において欧米と途上国との経済格差がまだ決定的でなかった時代には, 「周辺」のプロスポーツと「中核」のそれとの関係は完全な支配 - 従属関係にはなりえず, スポーツの受容とそプロ化は「中核」に対する対抗的なローカリティ刺激の装置になりえたことをこれらの事実は示している。

「野球戦争」の背景には, 故郷ベラクルスの米軍による占領を目の当たりにしたというという経験から起こるバスケルの反米的ナショナリズムがあるとされる (Klein: 1994,1997)。英

国スポーツによる旧植民地対大英帝国 (Magire & Pearton : 2000), サッカーによるスコットランド対イングランド, それに日本の高校野球によるウチナー対ヤマトウの対抗意識 (岡本 : 2003) のように, スポーツの普及先である「周辺」が発信元の「中核」への対抗の場をスポーツ通じて得, ローカルなアイデンティティを刺激するのと同様に, プロ野球も又, 普及先に「抗争の場」を与え「周辺」のローカリティを刺激する。

クラインは, 米墨国境にまたがってフランチャイズを置く LMB のチーム「テコス (Tecos)」の観察から両国の選手の比較を行い, メキシコ人選手のプレースタイルや野球に対する構えの源泉に男性性を重んじる「マチスモ (Machismo)」という思考があるとし, 米国野球とは異質なメキシコ野球を自覚することによってメキシコ人選手, 観客がアイデンティティを確認している (Klein : 1995, 1997, 151-170)。

このようなスポーツを通じて表出されるローカルな意識は, 受容側からのみ発生するわけではない。先に述べた「周辺」へ下っていった「中核」の野球選手の異文化体験に基づく言説や米国メディアが作り出すラテン・アメリカの「低開発」ステレオタイプ (Regalado : 1994) もまた「自己」と「他者」を隔てる役割を果たしている。

3 : メキシコ野球にみられるローカリティ

3-1 : メキシコ性構築の場としての野球

独自にプロリーグを発足させ, 後に北米野球から選手の引抜きを行った歴史を持つものの, 結局は MLB の包摂の波を受けたドミニカとメキシコのプロ野球に共通点は多い。しかし, ドミニカプロ野球が冬季リーグ化し, 完全に北米野球への選手供給源, 育成の場に変貌したのに対し, LMB は MLB 傘下のマイナーリーグとなりながらも北米プロ野球とシーズンを同じくしている。このことは LMB がメキシコのプロ野球のとして東アジアのプロ野球同様の自立性を保っていることにつながっている。

中村 (2002) は, Sugden & Tomlinson ed. (1994) からグローバル化の中の文化的国家的アイデンティティの行き先として, ①均質化とローカルなその破壊, ②国家・ローカルへのその強化, ③国家的アイデンティティの衰退と新たな混交的アイデンティティの勃興という3つを提示しているが, 米国生まれのスポーツを受容しながら国内リーグを維持し, それによって米国に対抗した歴史を持つメキシコの野球からは②の傾向が強いことが読み取れる。

クラインは LMB チームの観察から, 野球を通じたメキシコ人のローカル意識の創造を見, これを排他的な「オート・ナショナリズム」, 国家の枠組みを超えて形成されるローカルなアイデンティティである「バイ・ナショナリズム」, 国境を越えたヒト・モノの流れから形成される地理的な場を越えた「トランス・ナショナリズム」に分類, 野球を通して選手, スタッフ,

観客がこれらの意識を形成すると主張する (Klein : 1997)。ここでは、野球はローカリティ形成のための「創られた伝統」(ホブズボウム&レンジャー編:1992)と化し、「想像の共同体」(アンダーソン:1997)形成の装置として機能する。

「野球戦争」後、LMBはMLBを中心とするプロ野球のシステムに包摂されていったが、この資本による「周辺」の包摂にあっても尚、その現場では均質化よりもむしろローカリティの再生という現象が見られる。本章では、そのシステムの周縁でプレーする選手とその中で頻繁に移動を繰り返す選手のフィールドワークからメキシコ野球を分析し、拡大しつつあるプロ野球の相互連関関係の中にみられるローカリティを探る。

調査はメキシコ(2007年12月)と韓国(2008年5月, 2009年6月)で実施した。前者においては冬季プロリーグの「ノロエステリーグ」、後者は韓国プロ野球(KBO)当局の許可と協力の下、選手のインタビューを行い、プロ野球のグローバルな拡大の中での彼らの意識を分析した。

3-2: 「ノロエステ」～拡大するプロ野球の周縁におけるローカリティ

コーエン(1993:56-70)は、第2次大戦後の中米カリブ地域の米国への労働移動を、「新しい奴隷群の一部」、「前世代の不自由労働者の子孫」ととらえ、低賃金・非熟練の労働を担う途上国からの移民が夢を求めて渡米するも、大半は低い地位に甘んじ、不安定・不法な状態に置かれ限定された権利しか与えられないことを述べている。その上で、その原因を米国資本によるメキシコ経済統合の歴史に求め、メキシコが米国の「労働力貯水池」と化していることを論証している。

現在のMLBとメキシコプロ野球との関係もこれになぞらえることができる。MLBから独立して運営され、独自のファームシステムを確立しているLMBが、MLBの下部組織である「ナショナル・アソシエーション」にリーグごと組み入れられている事実は、その選手契約を買い取るMLBにとってLMBが投資を要しない選手育成の場としても機能していることを示している。

その上、気候的な特徴からカリブ海諸国同様、北米のオフシーズンにも野球を行える環境は、「労働力貯水池」としての特徴をさらに強めている。この時期にメキシコ各地で実施される冬季リーグには、実に1000名以上の選手が雇用される¹⁵⁾。ここに集う選手たちはLMB所属の選手の他、米国や他のラテンアメリカ出身のマイナーリーガーである。彼ら低賃金の短期雇用者は冬季リーグによってオフシーズンの生活の糧を得、MLBはオフシーズンの間の選手育成の場をメキシコに確保することができる。

「ノロエステ」は、そのような冬季リーグのうちLMBの各球団と契約しながら「一軍」ではプレーできない若手選手が参加するリーグである。この中で選手たちは、食住付、2週間で

5万ペソ（約5万円）という報酬でプレーする¹⁶⁾。

このリーグにはLMBの若手選手の他、MLB球団と契約しているメキシコ人マイナーリーガーも参加していた。MLBのスカウト網はメキシコにも及んでおり、彼らはこのようなLMB傘下の地方リーグにまで足を運んで有望株を引き抜いてゆく。逆に言えば、LMB各球団にとっては、自軍の選手をMLBに「売る」こともビジネスのひとつとなっている。以下はその様なMLBとLMB間における選手の売買の一例である。

「ノロエステ」の参加チーム・「プレロス (Pureros)」は、LMB2球団から若手選手を受け入れている。北米と比べプロ野球の裾野の狭いメキシコでは、LMBの各球団が契約を結ぶ「二軍」選手の数が少ないため、複数の球団が共同でファームチームを確保する。このチームのJ・A選手は元々LMB球団「ティグレス」と契約を結んでいたが、彼に目をつけたMLB球団に引き抜かれ、2008年夏は米国でプレーした。この移籍の際、契約金10万ドルが発生したが、このうち彼の手元に残ったのは4分の1の2万5千ドルで、残りは彼の保有権を持つティグレスの手に渡った¹⁷⁾。

先述のように、LMBは「オーガナイズド・ベースボール」に組み入れられているが、制度上はLMBの各球団はMLB各球団の「二軍」ではない。しかし、実際にはMLB球団はLMB球団と業務提携を結ぶことによって、自軍の選手をメキシコに送り込んで経験を積ませたり、LMB球団からの選手獲得のルートを確立するなど、事実上これをファーム化している (Klein: 1997,146-147)。「ノロエステ」では以下のような選手の事例が見受けられた。

LMBの「ディアプロスロッホス」はMLB球団と業務提携を結び、選手の交流も行っている。ここからMLB球団へ移籍したE・L選手はそのような例の一人で、MLBと契約した2007年の夏はドミニカのアカデミーに送られ、当地のルーキー級リーグでプレーした。冬は「ノロエステ」に派遣され、「ディアプロスロッホス」のファームチームでステップアップをはかっている¹⁸⁾。

「ノロエステ」の各球団の経営は地元オーナーによる独立採算で行われている¹⁹⁾。そのため、LMBから若手選手を預かるだけでなく、独自に選手の獲得も行っている。以下の選手はこのような選手の事例である。

I・W選手はMLBの名門チームのファーム選手で2007年シーズンはA級でプレーした。2007-08年の冬季シーズンの当初はLMPでプレーしていたが、大リーガーも参加するこの

リーグでは力量を発揮できず解雇され、レギュラーシーズン終盤の12月になって「ノロエステ」の「ブロンコス (Broncos)」に加入した。来る2008年シーズンのMLBとの契約は既に済ませており、上級のリーグに昇格の予定である²⁰⁾。

上記3名の有望株選手は他の選手にとっては憧れであり、誇りでもある。彼らの観察から読み取れるのは、まさに「貯水池」としてのメキシコ野球である。メキシコにおける冬季マイナーリーグの一面は、他のラテンアメリカ諸国同様MLBのファームと化したプロ野球のそれである。しかし、このことは野球を通じたアメリカ資本によるメキシコの従属とその結果としてのアメリカ化を単に示しているわけではない。

クラインのエスノグラフからは、メキシコ人プロ野球選手の根強い母国に対する愛着、こだわりが見受けられる。MLBの春季キャンプに参加したものの、米国での評価の低さに怒りを感じLMBに戻る選手や、MLB球団との待遇を巡る交渉がうまくいかず、北米でのプレーが不可能になるのを覚悟の上LMBに復帰する選手は、LMBという働き場があることにより強化される根強いメキシコ人意識の存在を示している。又「オーガナイズド・ベースボール」の補完でしかない冬季リーグとは別に自前の夏季リーグを持つメキシコの選手は、給与、レベルとも高いが、米国人を中心とする外国人選手の多い冬季リーグにおける所属チームよりも、LMBにおける所属チームにより愛着を感じる。そして、野球という「抗争の場」を通じて示す「メキシコ人らしさ」や米国人選手との軋轢は、野球の伝播が、スポーツの普及の結果としての一方向的な「中核」による「周辺」の包摂を生むのではなく、ローカリティを刺激する機会になりうることを示している (Klein: 1997)。

この「ノロエステ」に参加する選手の多くも同様に、自軍の有望株を誇りに感じるとともに羨望の目で眺めているものの、北米野球という場に自らの将来を重ねあわせることは少ない。彼らにとっての「メジャーリーグ」は、あくまでLMBである。このことは以下の冬季リーグのトップリーグLMPでプレーするある若手有望株の事例から読み取ることができる。

LMPの一球団、「マヨス (Mayos)」の投手、M・SはLMBの名門「ディアブロス」の若手投手である。2006年夏はLMBの二軍にあたる北ソノラ・リーグでプレー、2007年になってようやくLMBに定着できた。実力をつけた彼は、冬季も2週間5000バツという「二軍」ではなく、MLBから派遣された選手も多いLMPでプレーすることになった。しかし、彼の射程には北米でのプレーは入っていない。現在のところ母国のプロ野球でのプレーしか思い浮かばないと彼は言う²¹⁾。

無論彼ら二軍半の選手が将来、富を求めて、あるいは、アスリートとしての向上心から北米

でのプレーを目指すこともあるだろう。しかし、その結果としての国外リーグへの移籍が彼らのメキシコ人意識と矛盾するものではないことは次項に述べる元メキシコ人大リーガーの事例から窺うことができる。

3-3：遠隔地において保存されるアイデンティティ～新たなローカリティの形

本章においてここまで語られてきた野球浸透によってかえって刺激された「マチスモ」や、プロ野球システムの周縁とも言える冬季マイナーリーグの選手に見られた根強いメキシコ人意識は、一見「中核」のスポーツを受け入れシステムの末端に組み入れられた「周辺」が見せるローカリティの再活性化、つまりグローバルな現象と解釈できる。ここに、「中核」からの均質化という流れ＝「グローバル化」だけではないグローバル化の本質が発見できるが、「周辺」のローカリティは、今や空間を越えて存在しうようになっている。以下に示すメキシコ出身の元大リーガーの例からは、グローバル化の進展の中、本来土地に根ざしたローカリティが空間を越えて保存されることが読み取れる。

元大リーガー、カリム・ガルシア (Karim Garcia) は 2008 年から韓国プロ野球リーグ (KBO) でプレーしている。母国で野球殿堂入りしているメキシコプロ野球の名選手の子として生まれた彼は、米国で高等教育を受け、高卒後に MLB の名門ドジャースと契約した。2 年間のマイナーリーグでのプレーの後、1995 年、大リーグに初昇格した。その後、10 年間大リーグでプレーするが、米国では移籍・降格・昇格を繰り返した。2005 年に日本プロ野球 (NPB) に移籍するも翌年限りで解雇されると、2007 年シーズンは、母国の名門球団スルタネス (Sultanes) でプレーした。ここで KBO のロッテ・ジャイアンツからのオファーを受けると 2008 年には韓国に渡った。

彼のプロキャリアの舞台のほとんどは北米でのものがある。傘下のマイナーリーグから MLB へステップアップするまでの姿は、多くの大リーガーの姿と重なる。そして、大リーグでレギュラーポジションを獲得することなく来日、その後さまざまな国を渡り歩くと後半生からはプロ野球のグローバル化の中、稼ぎ場所を求めて国境を渡る「ジャーニーマン」選手の典型的な姿が映し出されている。プレーヤーとして晩年を迎えている彼の今後のプレーヤーとしてのビジョンは以下のとおりである。

韓国で好成績を収め、チーム躍進の原動力となっていた彼は、現在の境遇に満足し、韓国でのプレーの続行を希望しているが、チャンスがあれば MLB に戻りたいとも思っている。しかし、32 歳という年齢を考えるとそれがもはや現実的ではないことも承知していた²²⁾。

2008年のオールスターゲームのファン投票では史上最多得票を獲得するなど、韓国でファンの熱狂的な支持を受けた彼は、韓国でのプレー環境を気に入っており、シーズン後、より報酬の高いNPBへの復帰も考えたが、翌2009年シーズンも韓国でプレーすることを決め、今では韓国で自身のキャリアを終えようと考えている²³⁾。

韓国球団の提示した好条件に誘われて母国メキシコのリーグを1年で抜け出し²⁴⁾、富を求めてスポーツという技能を携えて国境をわたる彼の姿は「傭兵」(Maguire: 1996)のそれである。それと同時に報酬よりもプレー環境を考えて韓国でキャリアを終えようとする彼の姿は、生活のためというより国境を渡ってのプレーを楽しむ「遊牧的コスモポリタン」(Maguire: 同上)でもあり、その姿からはローカルなアイデンティティは窺えないように見える。

彼のキャリアの中で、LMBでのプレーはNPBから解雇された翌年の2007年シーズンだけである。それも球団から住居まで提供されての特別待遇での元大リーガーとしての入団は²⁵⁾、むしろLMBに参加する外国人選手の姿と重なる。ここまでの彼から浮かび上がるのは、野球というスポーツの受容によって無国籍化したアスリートの姿である。

しかし、彼のプロキャリアをさらに紐解くと、彼が根強いメキシコ人意識を持ち続けていることが窺える。彼は米国やアジアでプレーする一方、母国の冬季リーグLMPに17年に亘って参加してきた²⁶⁾。

MLB選手の報酬の高騰により、かつて大リーガーの報酬を補完する役割を果たしていた中南米カリブ地域の冬季リーグは、マイナーリーガーを中心とする若手選手育成の場とその役割を変容させている(Klein: 1991)²⁷⁾。大リーグ時代や、日本プロ野球在籍時、彼は経済的には報酬の低い冬季リーグに参加する必要はなかったはずである。韓国で手にした10万ドルの契約金と20万ドルの年俸も²⁸⁾、既にベテランとなった彼が冬季リーグへの参加をとりやめ、米国にある本宅でゆっくりオフシーズンを過ごそうと思うには十分なものである。その上、現在MLBが怪我を恐れてラテンアメリカ出身の大リーガーに対して冬季リーグの参加を控えさせようとするのと同様に、韓国球団も彼の冬季リーグ参加を否定的に捉えている²⁹⁾。それでも彼は所属球団ロッチェの心配をよそに2008年のオフシーズンもLMBに参加、さらには韓国球団の春季キャンプにも参加せず母国の代表として第二回WBCでプレーした³⁰⁾。

彼はその理由をこう述べる。

“I love its atmosphere, their Mexican style baseball. That’s why I’ve played for Mexican Pacific League. It’s for my identity. I am a Mexican even if I live anywhere.”³¹⁾

プロ野球の頂点・大リーグにまで登りつめ、米国の永住権を取得し、17年間のプロキャリア

で実に4カ国でプレーした彼は引退後、母国メキシコへは戻るつもりはないと言う³²⁾。しかし、このことは彼の中のメキシコ性を否定するものではない。彼の強烈な母国へのアイデンティティは彼がプロキャリアの最後の場だと位置づける韓国球団の帽子に縫いこまれたメキシコ国旗に象徴される。

ニューヨークやロンドンで、アーティストなど文化的な職業を夢見て暮らす日本人の若者が、母国を離れることによりかえって「日本人」のアイデンティティを強化するように（藤田：2008）、グローバル化の進展に伴うヒトの移動がコスモポリタンのアイデンティティを必ずしも作るわけではない。ミラー（Miller et al.：2003）も、スポーツのグローバル化によって生じる「新しい文化的国際分業」が世界に散らばったある土地のひとつのローカルなアイデンティティを喪失させるよりは、むしろ空間を越えて分散させることを指摘している。遠く離れた場を結ぶメディアの発達はトランスナショナルなアイデンティティを呼び起こし（アパデュライ：2004）、ナショナリズムという本来土地に由来したアイデンティティさえ空間を越えて「遠隔地ナショナリズム」として維持しうる（アンダーソン：2005）。

野球という技能を携えて世界を渡り歩くガルシアの根強い母国メキシコへの意識は、グローバル化したスポーツシーンにおいてローカルなアイデンティティが土地に留まることによってしか維持できるものではなく、かえって「外」にいることによって触発されることもあることを示している。

米国で高等教育を受け、夏季リーグに限って言えばプロキャリアのほとんどを外国で過ごした彼だが、韓国の野球に敬意を表しながらも、毎年の母国での冬季リーグや国際大会への参加からは根強いメキシコ人意識が感じられる³³⁾。彼にとって、プレーを通じての世界漫遊はビジネスであり、それが終われば、アイデンティティ確認のため母国に帰ってプレーし、冬季リーグの終了後も母の住まう故郷で短いオフシーズンを過ごす。故郷で展開される独特の「お祭りベースボール」（ホワイティング：1987,263-291）は彼にとってアイデンティティ確認の場として機能している。

スポーツのグローバル化、ことに資本と結びついた近年のそれは、プロアスリートの地球規模での移動を促した。そのことはスポーツを媒介とした文化、アイデンティティの均質化をもたらすものではない。グローバル化した世界にあって、スポーツという共通の舞台の設置は、それを通じた他者への意識を強め、そこから新たなローカルリティが想像される可能性をもっている。

おわりに

本稿では、野球というスポーツが資本と結びついてMLBを頂点としたシステムを構築しつ

つ拡大してゆく中、その「周辺」でおこる「中核」からの一方的な文化的制度的受容という文脈では片付けられないローカリティの再生をメキシコ野球に見てきた。

野球というスポーツがプロ興行というかたちで現在拡大しつつあることが、経済的文化的な「中核」による「周辺」の包摂という側面をもっていることは否定し得ない。スポーツの拡大の要因は第一義的には政治・経済・文化的領域における力関係である（グットマン：1997,198）。メキシコ人たちが米国生まれのゲームを行うことがアメリカ化という側面をもっていることは間違いのないことであり、拡大するプロスポーツビジネスの連関関係の中、メキシコのプロ野球は北米野球への「労働力貯水池」と化している。

しかし、このような形での「中核」発の文化の「周辺」への普及は、ローカリティの喪失を意味するわけではない。グローバル化の文脈からは、「中核」文化の刺激を受けてローカリティが再活性・保存される様が想起され、野球のグローバル化の波を受けたメキシコでは、歴史的な経緯から他の中米・カリブ地域とは異なったMLBを補完する冬季リーグだけではない、独自のプロ野球のシステムが構築された。ここでは、「マチスモ」に代表されるメキシコ性が取り込まれ（Klein：1995）、米国のそれとは異質な独特の「われわれの野球」が展開され、メキシコ人選手のアイデンティティを強化している。

プロ野球世界規模の連関関係の拡大は、地球規模でのプレーヤーの移動も又刺激している。MLBでプレーするトップアスリートのほか、MLB球団と契約し組織の末端に組み入れられたシステムの最下層のプレーヤーはドミニカのアカデミーや北米のマイナーリーグに送られ、MLBから「下降移籍」（千葉・海老原：1999）した選手は東アジアへも向かう。このようなグローバル化の進展に伴う人間の移動は、コスモポリタンの意識を醸成するよりは、遠く離れた土地を瞬時に結ぶメディアの発達した現在では、むしろトランスナショナルなローカリティを呼び起こし、それは空間を越えて維持される。

このような意識は本質的には想像の産物であり、実体のないものである。しかし、外部からの刺激はその実体のないものにかたちを与える役割を果たす。ビーズレイは、メキシコ史において、外圧を受けながらもメキシコ人が外部からの文化事象を受け入れつつそれをローカルなそれに取り込みながらメキシコ人たるアイデンティティを構築してゆく様を論じたが（Beezley：2008）、本稿における野球の観察でも、同様にスポーツ受容を通じたメキシコ性が構築される様がうかがえた。

そのメキシコ性は、グローバル化した世界にあっては、メキシコを出てゆくことによってかえって強化される。海を越えて移動を繰り返す「傭兵」として国際的な移籍を繰り返すガルシア選手にとって、拡大を続けるプロ野球システムの中、様々な場所で増殖・再生産される「ローカライズド」された野球を肌で感じた経験は、各々の場で異なったアイデンティティを形成させた。MLBにおいてはしばしば差別、偏見にさらされる対象の「周辺」から来た「ラティーノ」

選手として (Regalado : 1994), 日本・韓国では元大リーガーの「助っ人」として, 彼は周囲の環境に自己を適合させたのだが, その中でもメキシコ人意識を失うことはなかった。そのメキシコ人である自己を確認する場として機能するのが, 世界中に散らばったメキシコ人プロ野球選手が集う冬季リーグであり, さらに言えば彼が参加した WBC や五輪予選という野球のグローバルな表象は, われわれが「ナショナリズム」と呼ぶグローバルなアイデンティティをさらに強化する。

第 2 回 WBC は, その予選第 1 ラウンドが初めてメキシコシティで行われた。自国チームを応援すべく連日スタンドを埋めた観衆に, スポーツのグローバル化によって刺激されるローカリティを読み取れるが, その一方でスポーツをグローバルに拡大させている資本が, 国際大会という「抗争の場」を通じてローカリティをも商品化させていることにも目を向ける必要がある。つまりスポーツを通じて刺激されるローカリティはプロ野球のシステム増殖の装置にもなっているのである。

注

- 1) 現実には中南米全域に野球が普及しているわけではない。しかし, サッカーではなく野球が「国民的娯楽」化している国であるドミニカ, ニカラグア, ベネズエラ, サッカーほどではないが野球が人気を博しており, プロリーグが存在しているメキシコ, コロンビアの歴史を紐解けば, 野球というスポーツと米国のヘゲモニーとの関連を指摘できる。
- 2) 遠藤 (2007) は, 「中核」文化の拡大普及に対する「周辺」文化の反応について, 「周辺」のローカリティの再活性化を述べたロバートソンの「グローバル化」だけでは不十分だとし, グローバル化に伴う「周辺」文化の刺激を受け変容した「中核」文化を「ローカライズド文化」と名づけこれをグローバル文化の本質であるとした。
- 3) 北米大陸に展開される MLB とその傘下のマイナーリーグの統括組織「ナショナル・アソシエーション」を総称して「オーガナイズド・ベースボール」という。この他, 北米にはこれに属さないリーグも存在する。かつての「ニグロリーグ」はその代表である。Klein (1997,82) はこの用語を, 白人以外の野球を未組織, 混沌, 悪質であるとみなす意識の表れであるとした。
- 4) 「脱領土化」については特にアバデュライ (2002) 参照。但しここでの邦訳は「脱領域化」となっている。
- 5) McKelvey (2006) もメキシコ各地に LMB とは別のリーグが存在していたこと, 1930 年代末には冬季リーグが行われていたことを指摘している。
- 6) バスケルは, メキシコシティの球団「ディアブロスロホス (Diablos Rojos)」と球場デルタパークも所有していた (Klein : 1994)。
- 7) メキシコに渡ったニグロリーグのスター選手には, クール・パパ・ベル (James “Cool Papa” Bell), サチェル・ページ (Leroy “Satchel” Page), ジョシュ・ギブソン (Josh Gibson) などがある (McKelvey : 2006, 49-55)。
- 8) 1946 年に黒字を計上したのは 8 球団中モンテレー球団だけであった (McKelvey : 2006, 169 -170)。
- 9) 1953 年に 6 に減少した LMB の球団数は, 1979 年には 20 球団にまで拡大するが, 選手の待遇をめぐっ

- て起こった翌年のストライキによって一時6球団に縮小する。翌1981年には16球団となり、新たに発足した選手組合の自主運営による新リーグ「ナシオナル (Nacional)」と競合するが、1986年に「ナシオナル」が休止に追い込まれた後も16球団制で現在に至っている (LaFrance: 1995, LMB 記録集 'Quien es Quien 2006')。
- 10) 北ソノラリーグではLMBから供給される選手の他、各球団が独自に選手を獲得している。
 - 11) この両リーグは、夏季の「北ソノラ」、「タバスコ」と同じく地方の球団がLMBの各球団から選手、コーチを預かるという形で運営されている。そのため、監督・コーチ・トレーナーにとってはLMBのオフシーズンの働き場としても機能している(2007年12月のフィールドワークでの観察、インタビュー)。また「ノロエステ」では、LMBからの選手のほか、MLB傘下のマイナーリーガーを(同上)、「ベラクルス」では、独自に外国人選手を受け入れている(ベラクルス州リーグホームページ (<http://www.liv.com.mx/>, 2008.12.15))。
 - 12) 本稿では、「スペクテイター・スポーツ」の語を、その参加者が競技を行うのではなく、観戦するために集う、そのスポーツそのものが集客装置として機能しているスポーツを指す用語として使用する。
 - 13) ドミニカプロ野球のMLBによる包摂については、Klein (1991) など参照。また、いずれも北米プロ野球とシーズンを同じくしたコロンビア (1948年発足)、ニカラグア (1956年発足) のプロ野球も、それぞれ1954年、1957年に冬季リーグ化し、「オーガナイズド・ベースボール」所属選手の育成、あるいはオフシーズンの稼ぎ場となり、事実上のファームと化した。
 - 14) 例えば、米国・カナダの「オーガナイズド・ベースボール」各リーグの球団は全てファームチームとして、MLB球団と選手の受け入れ契約を結び、チームの所属選手の保有権はMLB球団にあるのに対し、LMBの各球団は独自に選手を保有している。MLBとの関係はあくまで「提携」関係で、MLB球団の選手を受け入れロスターに入れることはあっても、LMB球団に所属する選手がMLB球団に移籍する場合は、MLB球団はLMB球団からその選手の保有権を買い取らねばならない(例えばLMBプエブラ球団からMLBロサンゼルス・ドジャースに移籍したフェルナンド・バレンズエラ (Fernando Valenzuela) の例を見よ (LaFrance: 1985))。この関係はフリーエージェントでない移籍希望者が出た場合、その選手を「ポスティング」にかけ、その選手との契約をMLBが買い取る、日本プロ野球 (NPB) 球団とMLBとの関係に近い。
 - 15) カリビアンウインターリーグホームページ (<http://mlb.mlb.com/mlb/events/winterleagues/?league=car>) 及びベラクルス州リーグホームページ (www.liv.com.mx/)、リガノロエステ・ホームページ (www.ligadelnoroeste.com.mx/)、メキシカンアカデミー・ホームページ (<http://beisbollmb.com/academia/>) 参照。これら10月～2月に行われる諸リーグの選手のロスターの合計は1000人を超える。
 - 16) フィールドワークでの複数の選手へのインタビュー (2007.12.26-12.30)。
 - 17) J・A選手へのインタビュー (2007.12.30, ナジャリ州テクアラ、アドリファ・ルイス・マテオ球場)。
 - 18) E・L選手へのインタビュー (2007.12.26, ナジャリ州テピック・ユニベルサリオ球場)。
 - 19) 例えば、州都テピックの球団「ディアブロス」はLMB「ディアブロスロッホス」のファームチームであるが、経営は日系自動車を扱うディーラー会社のオーナーが行っていた。
 - 20) I・W選手へのインタビュー (2007.12.27, ナジャリ州コンポステラ・ヒルベルト・フローレス・ムニョス球場)。
 - 21) M・S投手へのインタビュー (2007.12.28, シナロア州クリアカン・G・A・フローレス球場)。
 - 22) カリム・ガルシア選手へのインタビュー (2008.5.5, 韓国光州市無等山運動場)。

- 23) スポーツソウルホームページ (韓国語版) 2008.11.13 (www.sportsseoul.com)。)
- 24) 注 22 に同じ。
- 25) 同上。
- 26) 同上。彼は 2008-09 年シーズンも LMP に参加した。
- 27) 又, Ruck (1990) も 1976 年のフリーエージェント制導入以後, 特に 1980 年代に入って大リーグ選手の報酬が高騰し, その結果冬季リーグでのプレー中の怪我で大リーグの契約を失うのを恐れたラテン諸国の選手が母国でのプレーを控えるようになったり, 同時に大リーグ球団もラテン系選手に冬季リーグへの不参加を養成するようになった結果, 冬季リーグには大リーグ昇格前, あるいはレギュラーポジション獲得以前の選手しか参加しなくなったことを指摘している。現在においても冬季リーグに参加するマイナーリーグの選手の報酬は, 北米でのそれより冬季リーグの方が高いことが多い (米国・カナダ数箇所におけるラテン系選手へのインタビュー, 2009.8)。
- 28) インタビューに際して, 彼は収入に関しては明言をしなかった。しかし, 韓国での報酬は KBO 発行の “Korean Pro Baseball 2008 Guide Book” からうかがい知ることができる。
- 29) スポーツソウルホームページ (韓国語版) 2008.12.15 (www.sportsseoul.com)。この記事では 2008 年シーズンにおいて好成績を残したガルシアに対して, シーズンオフにはゆっくり体を休めて欲しいと希望する球団の願いに反して, 彼が例年のように LMP に参加することが物議をかもしていると報じている。又, ここではガルシアなどベテラン選手の冬季リーグ参加を金銭目的だとしているが, 注 27 で述べたようにベテラン選手にはむしろ金銭目的で低報酬の冬季リーグに参加する理由は見当たらず, この部分については, 当記事の筆者の冬季リーグに対する見識のなさから来たものだと考えるのが妥当である。
- 30) スポーツソウルホームページ (韓国語版, 2009.2.3)。この記事では, ロッテ球団の春季キャンプに参加せず LMP のシーズン終了後, WBC メキシコ代表の合宿に参加, そのまま母国での予選リーグに出場する予定のガルシアに対する球団の危惧に対して, ロッテ球団の米国人監督がガルシアを支持したことが報じられている。しかし, 現実には韓国でのシーズン開始後, リーグ戦前半のガルシアの成績は振るわず, この原因を球団側は, ベテランの彼がオフに体を休めず冬季リーグ, WBC に続けて参加したことによる調整の失敗に求めている (ロッテ球団スタッフへのインタビュー, 2009.6.24, 韓国釜山市サジク球場)。
- 31) ガルシア選手へのインタビュー (2009.6.24, 韓国釜山市サジク球場)。
- 32) 同上。
- 33) WBC ホームページ “Garcia lauds Korean colleagues” (<http://web.worldbaseballclassic.com/news/>) 2009.3.16。

* 本稿に関わる研究で実施したフィールドワークの一部は, 2008,09 年度立命館大学大学院国際的研究活動研究費による助成を受けて行ったものである。

参考文献

- Arbena, Joseph L. et al., (1991) . “Sport, Development, and Mexican Nationalism, 1920-1970”, *Journal of Sport History*, 18-3, 350-364.
- Beezley, William H., (1985) . “The Rise of Baseball in Mexico and the first Valenzuela”, *Studies in* 196 (390)

- Latin American Popular Culture*, 4, 3-13.
- (1988) . “Bicycles, Modernization, and Mexico”, Arbena, Joseph L. ed., *Sport and Society in Latin America : Diffusion, Dependency, and the Rise of Mass Culture*, Greenwood Press, 15-28.
- (2008) . *Mexican National Identity: Memory, Innuendo, and Popular Culture*, The University of Arizona Press.
- Franks, Joel (2001) . “California Baseball’s Mixed Multitudes”, Robert Elias, ed., *Baseball and the American Dream: Race, Class, and the National Pastime*, Sharpe, 102-120.
- Gelber, Steven M. (1983) . “Working at Playing: The Culture of the Workplace and the Rise of Baseball”, *Journal of Social History*, 16-4, 3-22.
- Houlihan, Barrie (1994) . “Homogenization, Americanization, and Creolization of Sport: Varieties of Globalization”, *Sociology of Sport Journal*, 11, 356-375.
- Joseph, Gilbert M. (1988) . “Forging the Regional Pastime: Baseball and Class in Yucatan”, *Sport and Society in Latin America*, 29- 61.
- Klein, Alan M. (1991) . *SUGARBALL : The American Game, the Dominican Dream*, Yale University Press.
- (1994) . “Baseball Wars: The Mexican Baseball League and Nationalism in 1946”, *Studies in Latin American Popular Culture*, 13, 33-56.
- (1995) . “Tender Machos: Masculine Contrasts in the Mexican Baseball League”, *Sociology of Sport Journal*, 12, 370-388.
- (1997) . *Baseball on the Border: A Tales of Two Laredos*, Princeton University Press.
- LaFrance, David G. (1985) . “American Popular Image of the United States through the Baseball Hero, Fernand Valenzuela”, *Studies in Latin American Popular Culture*, 4, 14-23.
- et al. (1995) . “Labor, the State, and Professional Baseball in Mexico in the 1980s”, *Journal of Sport History*, 22-2, 111-134.
- Maguire, Joseph (1996) . “Blade Runners: Canadian Migrants, Ice Hockey, and the Global Sports Process”, *Journal of Sport & Social Issues*, 20, 335-360.
- Maguire, J. & Pearton, R. (2000) . “Global Sport and the Migration Patterns of France ’98 World Cup Finals Players: Some Preliminary Observations”, *The Future of Football, Soccer & Society*. 1-1, 175-189.
- Mandle, Jay R. & Mandle, Joan D. (1994) . “The failure of Caribbean integration: Lessons from grass roots basketball”, *Studies in Latin American Popular Culture*, 13, 153-165.
- Mason, Tony (1994) . “The Bogota Affair”, Bale & Maguire ed., *The Global Sports Arena*, 39-48.
- McGehee, Richard V. (1994) . “Sports and Recreational Activities in Guatemala and Mexico, Late 1800s to 1926”, *Studies in Latin American Popular Culture*, 13, 7-33.
- McKelvey, G. Richard, (2006) . *Mexican raiders in the major leagues: the Pasquel brothers vs. organized baseball, 1946*, McFarland.
- Miller, Toby et al. (2003) . “The Over-Production of US Sports and the New International Division of Cultural Labor”, *International Review for the Sociology of Sport*, 38, 427-440.
- Moorhouse, H.F. (1994) . “Blue Bonnets over Border: Scotland and the Migration of Footballers”, Bale

- & Maguire ed. *The Global Sports Arena*, 78-96.
- Nakagawa, Kerry (2001) . "The Road To Cooperstown: Japanese American Baseball, 1899-1999", *Baseball and the American Dream: Race, Class, and the National Pastime*, Sharpe, 123-134.
- Regalado, Samuel O. (1994) . "'Image is Everything": Latin Baseball Players and the United States Press", *Studies in Latin American Popular Culture*, 13, 101-114.
- Ruck, Rob (1990) . "Winter ball in crisis", *Baseball America*, February 25, 8-9.
- Schell, Jr., William et al. (1993) . "Lions, Bulls, and Baseball: Colonel R.C. Pate and Modern Sports Promotiom in Mexico", *Journal of Sport History*, 20, 259-275.
- Spracklen, Karl (2008) . "Negotiations of Being and Becoming: Minority Ethnic Rugby League in the Cathar Country of France", *International Review for the Sociology of Sport*, 42-2, 201-218.
- Sugden, John & Tomlinson, Alan ed. (1994) *Host and Champions, Soccer Cultures, National Identities and the USA World Cup*, Ashgate Publishing Limited, Hants.
- Virtue, John (2008) . *South of the Color Barrier: How Jorge Pasquel the Mexican League Pushed Baseball Toward Racial Integration*, McFarland.
- アパデュライ, アルジュン, 門田建一訳 (2004) 『さまよえる近代：グローバル化の文化研究』平凡社
—————, ————— (2002) 「グローバル文化経済における乖離構造と差異：グローバル/ローカルな空間の論理」『思想』933, 5-31.
- アンダーソン, ベネディクト, 白石さや, 白石隆訳 (1997) 『想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』NTT出版
—————, 糟谷啓介ら訳 (2005) 『比較の亡霊：ナショナリズム・東南アジア・世界』作品社
- 石井昌幸 (1999) 「筋肉の福音—スポーツマン宣教師と文化帝国主義」, 『現代スポーツ評論』1, 14-25.
- 石原豊一 (2008) 「ベースボールにみるグローバル化—MLBによるドミニカプロ野球包摂を中心に—」, 『立命館国際研究』21-1, 111-129.
- ウォーラステイン, イマニュエル, 川北稔訳 (1993) 『近代世界システム』名古屋大学出版会
- 遠藤薫 (2007) 「現代文化におけるグローバリゼーション/ローカリゼーションのねじれ—理論と現実—」, 遠藤編 『グローバリゼーションと文化変容—音楽, ファッション, 労働からみる世界—』世界思想社, 1-19.
- 岡本純也 (2003) 「奴らのゲームで奴らを倒せ～沖縄高校野球界にみる再生産戦略～」, 海老原修編著 『現代スポーツ社会学序説』杏林書院, 88-93.
- 小田切毅一 (1982) 『アメリカスポーツの文化史～現代スポーツの底流』不味堂出版
- ギデンス, アンソニー, 佐和隆光訳 (2001) 『暴走する世界：グローバリゼーションは何をどう変えるのか』ダイヤモンド社
- グットマン, アレン, 谷川稔ら訳 (1997) 『スポーツと帝国～近代スポーツと文化帝国主義』昭和堂
- クロマティ, ウォーレン, ホワイティング, ロバート, 松井みどり訳 (1991) 『さらばサムライ野球』講談社
- コーエン, ロビン, 駒井洋監訳 (2001) 『グローバル・ディアスポラ』明石書店
- 関川夏央 (1984) 『海峡を越えたホムラン：祖国という名の異文化』双葉社
- 千葉直樹, 海老原修 (1999) 「トップ・アスリートにおける操作的越境からのシークレット・メッセージ」, 『スポーツ社会学研究』7, 44-54.

- トムリンソン, ジョン, 片岡信訳 (1997) 『文化帝国主義』 青土社
- 藤田結子 (2008) 『文化移民: 越境する日本の若者とメディア』 新曜社
- フリードマン, トーマス, 東江一紀, 服部清美訳 (2000) 『レクサスとオリーブの木: グローバリゼーションの正体』 草思社
- ホプズボウム, E, レンジャー, T, 前川啓治ら訳 (1994) 『創られた伝統』 紀伊國屋書店
- ホワイティング, ロバート, 鈴木武樹訳 (1980) 『菊とバット: プロ野球にみるニッポンスタイル』 サイマル出版会
- , 玉木正之訳 (1990) 『和をもって日本となす』 角川書店
- , 松井みどり訳 (1987) 『ニッポン野球は永久に不滅です』 ちくま文庫
- 中村祐司 (2002) 「ナショナリズムとメガ・イベント—2002年 W 杯における商業セクターの戦略と社会現象に注目して」『現代スポーツ評論』 7,72-85.
- 西山哲郎 (2006) 『近代スポーツ文化とはなにか』 世界思想社 2006
- リッツァ, ジョージ, 正岡寛司監訳 (2005) 『無のグローバル化: 拡大する消費社会と「存在」の消失』 明石書店
- ロバートソン, ローランド, 阿部美哉訳 (1997) 『グローバリゼーション: 地球文化の社会理論』 東京大学出版会

(石原 豊一, 立命館大学大学院国際関係研究科博士後期課程)

Globalization Watching from Baseball (2): Locality in the Observation of the Mexican Baseball

The cultural phenomenon of sports is a product of modern industrialization, and it has expanded worldwide riding on the wave of modernization from Europe and the U.S. In this context, it can be interpreted that the modernization in Latin America and the Caribbean states since the late 19th century was promoted in a form that parallels the increase of political and economic influences from the U.S. and that the diffusion of baseball is its symbol.

The study of globalization accomplishes the transformation from the cultural imperialism model that claims connotation and infiltration of economical and cultural influence from the core to periphery, to the glocalization model, that explains reproduction of local identity and cultural hybrid mixture. These contexts show that globalization cannot be understood only from the perspective of the one-sided expansion of the system, capital, and culture.

Thinking about baseball, the American national pastime was transformed to Mexicans' own "beisbol" by incorporating various local elements in the process of the diffusion to Latin America, and now functions as a stage to confirm their identity in the globalized world.

In this paper, Mexican professional baseball is illustrated as an example of such a glocalized phenomenon. Mexican baseball's pyramid structure shows one aspect of the globalized sports in which the "periphery", that seems to be taken into the "core" at a glance, rather awakes the local identity.

In addition, as seen from the observation of one Mexican mercenary athlete playing for a Korean professional baseball team, their local identity can be maintained regardless of where they live.

(ISHIAHARA, Toyokazu, Doctoral Program in International Relations, Graduate School of International Relations, Ritsumeikan University)